



疑問語につく「も」と「でも」の使い分けについて：
名詞述語文、形容詞述語文を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 周, 侃 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017941

疑問語につく「も」と「でも」の使い分けについて

一名詞述語文，形容詞述語文を中心にー

周 侃

1. はじめに

本稿の目的は、名詞述語文と形容詞述語文における、疑問語につくとりたて助詞「も」と「でも」の使い分けを明らかにし、日本語教育に役立てることである。

第2節で詳しく説明するが、従来の研究では、主に肯定、否定の述語のどちらを伴うかにより、「も」と「でも」の使い分けを説明できるとされてきた。また、「でも」の構文特徴を、現実性に関わる観点から説明する研究もある。しかし、これらの研究には、まだ不十分なところがあると考えられる。

例えば、以下のような数量詞述語文、属性形容詞述語文の例において、「も」が用いられ、「でも」が用いられない理由について、従来の研究の記述ではうまく説明されていない。

- (1) この三角形の辺の長さはどれも (*どれでも) 5 cm。 (作例)
- (2) くるっと巻いたスポンジも中に挟んだ生クリームも、どちらも (*どちらでも) 真っ白! (google)

本稿ではこれらについて、「現実性」という観点からの説明を試みる。

以下の第2節で、先行研究を概観し、問題の所在と本稿の考察の必要性を述べる。第3節で、本稿で言う「現実性」とは何かについて定義し、それに基づいて具体的な考察を行う。第4節をまとめとする。

2. 先行研究

2.1 「現実性」と「でも」について

野田（1995）では、「も」については、「基本的に、肯定否定の階層のもので、否定的な述語と呼応するものだと考えられる。」(p.28)とするが、「でも」に関しては、以下のように「現実性」という用語を用いて、その構文特徴を説明している。

このように、意外の「でも」は、アスペクトの階層ともいくらか関係があるが、基本的には現実性の階層のもので、仮定や可能性の述語と呼応するものだと考えられる。

（野田（1995） p.29）

しかし、「現実性」とは何かということについては、具体的に説明されていない。

また、日本語記述文法研究会（2009）では、「現実性」に関わる概念として、「仮定的な意味」という表現を用い、数量詞述語文と属性形容詞述語文を例として、「も」と「でも」の構文特徴を説明している。

しかし、次のように疑問語の種類や後にくる表現などの使用条件によっては、「でも」と「も」の両方が使用可能な場合もある。「でも」を用いた場合は仮定的な意味が生じやすいが、「も」との違いがあまり感じられないこともある。

(3) この店のものはどれ {も／でも} 100円だ。

(4) 肉と魚のどちら {も／でも} いい。

（略－筆者）

（日本語記述文法研究会（2009） pp.164-165）

しかし、この記述では、第1節で述べた例（1）のような数量詞述語文、例（2）のような属性形容詞述語文において、「でも」が用いられない理由についてうまく説明できない。

本稿では、この問題について、「現実性」という観点からの説明を試みる。

次に、数量詞と形容詞の関連研究の問題と、本稿の考察との関係について述べる。

2.2 数量詞に関する記述

2.2.1 数量詞と「特性」について

奥田(1988)は、「《特性》と《質》とをくべつする必要は、典型的なばあいにおいて、形容詞述語と名詞述語との意味的なちがいが、基本的にはここにあるようであるからである。」(p.112)と述べ、「質」と「特性」について、以下のように記述している。

かんたんにいえば、質はひとつの物からほかの物をくべつする、本質的な特性のセットである。ところが、《特性》は物のもっている、ひとつの側面、あるいはいくつかの側面を表現するにすぎないカテゴリーであって、まだ物の質的な特徴づけをあたえるまでにはいたっていない。もし《質》と《特性》とが述語の意味のなかにうつしとられて、文の意味的なタイプをくべつしているなら、述語の意味的なカテゴリーとしてふたつはくべつする必要がある。

(奥田(1988) p.111)

また、日本語文法学会(2014)では、この問題について以下のようにまとめている。

名詞文はおもに、主語にさしだされる物の質や特性をあらわす(「太郎は会社員だ」「花子は美人だ」)。特性は物の側面における特徴であり、質は物の本質的な特性のセットである。特性は形容詞文や動詞文もあらわせるが、質をあらわせるのは名詞文だけである。

(日本語文法学会(2014) p.611)

一般に数量詞は名詞として扱われるが（日本語文法学会（2014）pp.607-608など）、例（1）のような数量詞述語文は、「5 cm」という数量詞を通して、「三角形」という「物のもっている、ひとつの側面」、つまり「特性」を表現している。

(1) この三角形の辺の長さはどれも 5 cm。 (再掲)

このような性質に関しては、従来の数量詞に関する研究においてもよく言及されている。例えば、神尾（1977）は、例（24）の「二千CC」について「限定詞ではなく、形容詞などと同じ一般の修飾語句にすぎない。」（pp.86-87）と説明し、奥津（1989）は、例（13）bの「3キロ」を「属性Q」（p.203）と呼んでいる。

(24) 二千CCの車を買う（神尾（1977）p.86）

(13) b. 昔ある所に3キロの子豚が住んでいました。（奥津（1989）p.203）

日本語文法学会（2014）の用語とは異なるが、これらはいずれも数量詞を「車」や「子豚」の「特性」を表すものと捉えていると考えられる。

本稿では、この数量詞述語文における「特性」を形容詞述語文における「特性」と関連付けて考察していく。

2.2.2 数量詞と「評価」について

数量詞の研究に関し、「量に対する評価」という観点から、「量評価の連体詞」についての言及がある。

次の⑥の「たった」や「わずか」「ほんの」「たかが」などは、数量詞や、「たったこれだけ」のように指示詞に限定の副助詞のついたものに先行して、その量に対する評価を表している。これ

らを、仮に、「量評価の連体詞」と呼ぶことにしよう。

(略-筆者)

④ b. こんな絵がわずか一枚で何億円もするのか

(略-筆者)

(矢澤 (1989) pp.251-252)

「量評価の連体詞」は話し手の「その量に対する評価」であり、話し手の態度がすでに明らかになっている。

しかし数量詞そのものにおいても、話し手の主観的な考えの中に隠れた(「量評価の連体詞」よりも話し手の態度が前面化されていない)「評価」があると思われる。

前節で述べたように、数量詞述語も、形容詞述語と同じく特性を表す性質を持つと考えられる。そして第3節で述べるが、このような性質は形容詞における「評価」と大きく関わっており、この「評価」という観点が、数量詞述語文と形容詞述語文における「も」と「でも」の使い分けを記述することに繋がると考える。しかし今までの数量詞に関する研究では管見の限り、このような立場からの考察がなされていないようである。

2.3 形容詞と「評価」に関する記述

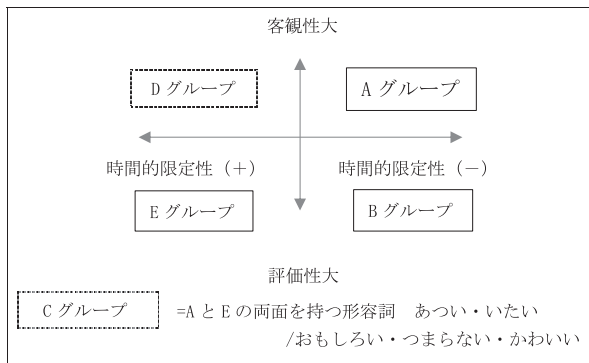
奥田の研究を受け、「評価」という観点から形容詞の意味、分類について分析、記述する試みとしては、樋口 (1996;2001), 八亀 (2003;2008) などが挙げられる。

樋口 (1996) は、「ほとんどの形容詞は、程度の差はあれ、評価的な意味につきまとわれている」(p.57) として、「状態形容詞」と「質形容詞」に関わる「評価」について言及している。また樋口 (2001) では、それまでの形容詞の研究において、形容詞の「評価的な側面についてあまり説明されてこなかった」ため、「《特性形容詞》と《状態形容詞》とにおける評価性のちがいをみていくなかで」、「形容詞の評価的意味」を具体的に記述している。(p.44)

その後、八亀（2003）は、樋口（2001）を中心とする一連の形容詞の研究について評価しながら修正を行い、八亀（2008）では八亀（2003）の用語を微調整し、「時間的限定性」と「評価」の両方を軸として、形容詞を分類している。

すべての形容詞（述語文）は評価性を持っており、特性形容詞ではそれは後ろに隠れ、状態形容詞では前面化する。「時間的限定性」と「評価」を軸として整理をすると、次のようにA B C D Eの五つのグループを取り出すことができる。

図 時間的限定性と評価を軸とする形容詞分類



(八亀 (2008) p.40)

また、「形容詞は特に客観的・主観的の両面をそなえた語類だ」(p.15)という西尾（1972）の記述を引用しながら、形容詞述語文の「評価」と関わる性格について以下のように述べている。このような性格は、実は「数量詞述語文」と「形容詞述語文」をまとめて、「現実性」の観点から考察する重要な根拠になると考える。

しかし、形容詞述語文の場合は、属性のもちぬしと属性を話し手が評価的に結びつける。したがって、次の場合、AさんとBさ

んが、同時に同じ部屋を見て発言している可能性がある。

（ Aさん：この部屋広いね。
Bさん：この部屋狭いね。

（八亀（2008）p.33）

この「評価」という観点から考える時、例えば、赤い物は誰が見ても「赤い」ので、その色は物の特性として、八亀（2008）が述べている「客観性大」のAグループに分類できると考えられる^{注1}。しかし、上の「広い、狭い」のような属性形容詞は、そのまま同じ「客観性大」のAグループに分類できるだろうか。同じ部屋に対し、誰が見ても、「広い」「狭い」と評価するなら、それはその部屋の、「客観性大」の特性として考えられるが、同じ部屋に対し、Aさんが「広い」と評価し、Bさんが「狭い」と評価するなら、「広い」と「狭い」のどちらが、その部屋の「客観性大」の特性を表すのか、思考に混乱が生じる。Aさんのその部屋に対する評価とBさんのその部屋に対する評価を、別々に見る場合に限り、「広い」「狭い」は、それぞれその部屋が持つ「客観性大」の特性となるのである。

このように、評価の主体の考えの世界にしか存在しない物の特性、評価の主体の考えによって、物の特性が変わるように見える属性形容詞は、明らかに、色を表す属性形容詞とは違う一面を持っていると言える。このような違いは、「評価」と深く関わるが、八亀の分類のもう一つの軸となっている「時間的限定性」と関係があるとは言い難い。

そのため、先行研究の成果を踏まえた上で、属性形容詞については新たな観点からの考察の必要があると考える。

2.4 まとめ

以上をまとめると、次のような問題が存在すると考える。

- ・「でも」は「現実性」の階層のものだとされているが、本稿で考察する「数量詞述語文」と「属性形容詞述語文」における「現実性」とは何かについて、これまでの研究では言及されていない。

- ・例 (1) のような数量詞述語文と例 (2) のような属性形容詞述語文において、「でも」が用いられない理由について、これまでの数量詞述語文、形容詞述語文いずれについての研究からも説明されていない。

次の第3節では、以上の問題についての説明を試みる。

3. 考察

3.1 考察の基準

「2.1」節で述べたように、「現実性」とそれに関連する用語を用いて、「でも」の構文特徴を説明しようとする先行研究はいくつかあるが、いずれも本稿で考察する「数量詞述語文」と「属性形容詞述語文」における「現実性」とは何かについて、具体的に定義されていない。本節では、まず前節で述べた「評価」の性格と深く関わる属性形容詞の間に存在している違いから、属性形容詞における「現実性」について以下のように定義してみる。

- I : 「現実性+」の属性形容詞：評価の主体に関わらず、誰が評価してもその客観的な特性^{注2}が認められる属性形容詞。
- II : 「現実性-」の属性形容詞：評価の主体により、その属性形容詞が表す特性が変わる属性形容詞。

そしてこのような定義は、「数量詞述語文」にも適応できると考える。

- III : 「現実性+」の数量詞：評価の主体に関わらず、誰が評価してもその客観的な数量が認められる数量詞。
- IV : 「現実性-」の数量詞：評価の主体により、その数量詞が表す数量が変わる数量詞。

上記の定義により、今まで述べてきた問題について以下のように考える。

例 (3), 例 (4) において「も」と「でも」がどちらも用いられることは、日本語記述文法研究会 (2009:pp.164-165) に言及されている。

(3) この店のものはどれ {も／でも} 100円だ。 (再掲)

(4) 肉と魚のどちら {も／でも} いい。 (再掲)

この例における「100円」「いい」は、いずれも「現実性-」の数量詞述語、属性形容詞述語であり、このような場合は「も」と「でも」の両方が用いられるのではないかと考える。このことは、「でも」を用いた場合は、仮定的な意味が生じやすい」(日本語記述文法研究会 (2009) p.164) という記述の意味するところと通じる。

以下では先行研究で言及されていない「現実性+」の文において、考察を行う。

(1) この三角形の辺の長さがどれも (*どれでも) 5 cm。 (再掲)

(2) くるっと巻いたスポンジも中に挟んだ生クリームも、どちらも (*どちらでも) 真っ白! (再掲)

3.2 形容詞述語文について

3.2.1 考察の対象について

「現実性+」の属性形容詞述語文として、本稿ではまず色彩形容詞述語文についての考察を行い、ほかの属性形容詞については今後順次考察していく。そして、疑問語については、日本語記述文法研究会 (2009) で属性形容詞述語文の考察に用いられている「どちら」を使って考察を行った。^{注3}

(4) 肉と魚のどちら {も／でも} いい。 (再掲)

3.2.2 色彩形容詞述語文について

「どちらも」「どちらでも」が色彩形容詞述語を取る例を中納言で

検索した結果、該当例はなかったが^{注4}、google検索では表1に示した5例が得られた。

表1 google検索による用例の内訳

疑問語+ も/でも	赤い	真っ赤	白い	真っ白	黒い	真っ黒	青い	真っ青	合計
どちらも	0例	0例	0例	1例	2例	1例	0例	1例	5例
どちらでも	0例	0例	0例	0例	0例	0例	0例	0例	0例

以下は、具体的な用例である。これらの用例において、「どちらも」はいずれも「どちらでも」に置き替えることができない。

- (2) くるっと巻いたスポンジも中に挟んだ生クリームも、どちらも (*どちらでも) 真っ白! (再掲)
- (5) ダイエットしたいので、C coffeeと、隣にあったチャコールコーヒー (カロリーセッタ) と比べてみようと思い、どちらも 購入してみました。C coffeeと、カロリーセッタ どちらも (*どちらでも) 黒い! です。溶かしやすさはほぼ同じかな。どちらも炭独特の香りはするが、そんなに気にならない。 (google)
- (6) 京都たかばしのラーメンはいつも第一旭に行ってしまうので実は初訪問。ラーメン小に、人気らしいヤキメシ。どちらも (*どちらでも) 黒い。ラーメンは色ほど味は濃くないがとはいえ濃いめ。もやしがシャキシャキしていて良いバランス。ヤキメシはこってりとした肉の味がしっかりしてて味は濃いめがたしかに美味しい。 (google)
- (7) 瓶は黒、キャップはイエローというパッケージも共通 (厳密にいうとベジマイトは瓶自体は透明で、中身の黒が透けていま

す)。ラベルはマーマイトははちみつなんかに近い，少しかわいらしい雰囲気ですが，ベジマイトはぱっと見サプリメントや薬みたいですね…。中身はどちらも（*どちらでも）真っ黒。そしてにおいが強烈！アンチョビのような，ナンプレーのような。マーマイトの方は少し甘さを感じるかな。ベジマイトのほうが硬派な印象。ラベル通りですね。（google）

(8) 空と湖どちらも（*どちらでも）真っ青！（google）

以上のことから，疑問語をとりたてる場合，「現実性+」の属性形容詞述語文における「も」と「でも」の使い分けのルールは，表2のようにまとめられる。

表2 考察の結果（属性形容詞述語文）

属性形容詞述語文	疑問語+も	疑問語+でも
I：「現実性+」の属性形容詞：（評価の主体に関わらず，誰が評価してもその客観的な特性が認められる属性形容詞。）	○	×

3.2.3 比較構文について

前節で「現実性+」の観点から色彩形容詞述語文についての考察を行ったが，その用例数は少なかった。よって本節では，属性形容詞述語文が「現実性+」となる例として，これに加えて比較構文についての考察を行う。比較構文を用いることで，「2.3節」で述べた，評価の主体の考えによって物の特性が変わるように見える属性形容詞であっても，「現実性+」の意味を表すようになることがある。従って，このような構文で前節の考察の結果を検証する。

中納言における該当例はなかったため^{注5}，以下作例を用いて説明する。

- (9) 彼の新しい家の部屋は、どちらも (*どちらでも) 前の家の部屋より狭い。 (作例)
- (10) うちの二匹の犬はどちらも (*どちらでも) 隣の犬より大きい。 (作例)

このように、第三者視点から、あるいは自分自身の視点から確認した現実の意味を表す属性形容詞述語文において、「どちらも」はいずれの場合でも「どちらでも」に置き替えられない。このことは、「現実性」という観点からの考察が色彩形容詞以外の属性形容詞述語文にも応用できる可能性を示唆していると考えられるため、今後の研究でさらに深く考察していく予定である。

3.3 名詞述語文について

3.3.1 数量詞述語文における「評価」について

まず、下の例 (3) において、数量詞「100円」という数値は、評価の客体本来の特性ではなく、評価の主体の評価が関与していると説明できる。「100円」は人間が定めた数値であるため、店の商品を一律「120円」と定めてもいいし、「90円」と定めてもいい。そして、値段の交渉ができる場合、あるいは閉店前の時間帯などの状況において、定価「100円」のものは、実際に割引で90円、80円、あるいはそれ以下の値段で売られる可能性も十分あり得る。つまり、「100円」という数値は、変動する可能性があるため、評価の客体本来の特性ではなく、動かぬ事実ではない。本稿では、このような数量詞を「現実性-」の数量詞だと分類する。

- (3) この店のものはどれ {も/でも} 100円だ。 (再掲)

もう一例挙げると、以下の例 (11) も同じ考えで説明できる。「3時間」は、人間の活動に関わることであり、A～Cコースで目的地まで行く人は、どのような方法で行くかにより、所要時間に対しての認

識が違ってくる。つまり、「3時間」という数値は変動する可能性があると思われる。歩いて「3時間」なら、自転車やバイクや車で行く場合、所要時間はそれぞれ短縮するため、「3時間」という数値も、評価の客体本来の特性ではなく、動かぬ事実ではない。そして、上記の例と同じく、このような「現実性-」の数量詞述語文においては、「も」も「でも」も、用いられる。

(11) A～Cコースの目的地までの所要時間はどれ（も/でも）3時間です。 (作例)

しかし、例(1)において、数量詞の「5 cm」は、評価の客体本来の特性であり、動かぬ事実である。「5 cm」という事実について、評価の主体の評価は変化できず、評価の主体が変わっても、評価の客体の特性を表す「5 cm」という数値は変わらない。

(1) この三角形の辺の長さはどれも（*どれでも）5 cm。 (再掲)

本稿では、このような数量詞を「現実性+」の数量詞だと分類し、そして「現実性+」の数量詞述語文において、「も」は用いられるが、「でも」は用いられないのではないかと考える。

もしこれが事実だとすれば、「現実性+」における「属性形容詞述語文」と「数量詞述語文」において、疑問語をとりたてる「も」と「でも」の使用実態を統一して説明できることになる。

これを検証するために、以下でコーパスを用いて、該当の用例を集めて考察を行った。疑問語については、日本語記述文法研究会(2009)で「数量詞述語文」の考察に用いられている「どれ」を用いた(注3も参照)。

(3) この店のものはどれ {も/でも} 100円だ。 (再掲)

3.3.2 数量詞述語文についての用例と考察

中納言とgoogleを用いて、「現実性+」の意味を表す「どれ+も/でも+数量詞」構文の検索を行った結果、「も」を用いる該当の数量詞述語文は以下の7例があったが、「でも」を用いる該当例はなかった。^{注6}

- (12) 図2-4 いろいろな分布の分散(注) すべて平均は0です。また(最大値-最小値)によって計算されるレンジ(範囲)はどれも(*どれでも) 二十です。(LBm4_00039)
- (13) スウェーデン, クロアチア, セルビア・モンテネグロ, ポーランドなどは苦手なスタイルにカテゴライズされるが,(相手側の)平均勝点はどれも(*どれでも) 1点未満。(PM51_00193)
- (14) 「初めてのブラジャー」「初めてのお兄さん」「初めてのパクチャリ」「初めてのマイホーム」—主人公どれも(*どれでも) 6年生。(PM52_00075)
- (15) ・ジェットログ「丸」タイプ サイズは丸太の径の違いでスリーサイズ 直径11cm~13cmのS 直径13cm~15cmのM 直径15cm~18cmのL 長さはどれも(*どれでも) 30cm。(google)
- (16) うちの子は5歳ですが,小さくて赤ちゃんから同じチャイシ(規定内)使ってます。ですが面倒だし,小さいとはいえ5歳なのに,変な感じですし可哀想な気もします。いい加減ジュニアシートと思い,昨日店見てきましたが。どれも(*どれでも) 15キロ~。身長共に少々足りません。(google)

- (17) 残りの4匹も診てもらったが、こちらは至って元気。先生に性別を尋ねると、白っぽい猫1匹がメスで、残りの3匹がたぶんオスだと。戻ってそれぞれの体重を測ると、どれも70g (*どれでも)くらい。(google)
- (18) 瓶ビールの王冠の溝の数(ギザギザ)を数えたらどれも (*どれでも)21個でした。(google)

以上のことから、疑問語をとりたてる場合、「現実性+」の数量詞述語文における「も」と「でも」の使い分けのルールは、表3のようにまとめられる。

表3 考察の結果(数量詞述語文)

数量詞述語文	疑問語+も	疑問語+でも
Ⅲ:「現実性+」の数量詞: (評価の主体に関わらず、誰が評価してもその客観的な数量が認められる数量詞。)	○	×

3.3.3 普通・固有名詞述語文について

次に、数量詞以外の名詞述語文についても考察を加える。中納言を用いて考察した結果は表4の通りであり、「どれでも」の該当例はなかった。^{注7}

表4 中納言検索による用例の内訳

疑問語+も/でも	名詞	
	どれも	総用例数
該当例(普通・固有名詞の例)		6例
どれでも	総用例数	14例
	該当例(普通・固有名詞の例)	-

該当の「どれも」の6例のいずれにおいても、「も」は「でも」に置き替えられない。

(19) サリーがそう言って、ジュリアに五通の封書を差し出した。
どれも (*どれでも) 督促状だった。 (OB4X_00068)

(20) 天井が高く聖堂のような感じだが、素朴な趣にあふれている。
 むきだしの大きな梁が高い位置で組みあわされ、中央にさがった古そうな黒い鉄の鎖から、荷馬車の車輪がさげられていた。
 その車輪には、ランプがぶらさがっている。どれも (*どれでも)
みな石油ランプだ。 (PB49_00800)

(21) 彼は急いで駆け寄って、荷台の横に記された文字に目をやった。
 ごくふつうの運送会社の名で、仕向先はクムブラーン、ニュー
 ポート、ブリッジエンド—どれも (*どれでも) サウス・ウェー
ルズだ。 (PB29_00590)

(22) 辺の長さがどれも (*どれでも) 8 cmの三角形。
 (OT11_00029)

(23) 四十九ページで紹介しているコノハズク、トラフズク、シマ
 フクロウ、アオバズクは、どれも (*どれでも) フクロウのな
かまです。 (PB54_00058)

(24) ホトトギス、ツツドリ、ジュウイチはどれも (*どれでも) カッ
コウのなかまです。 (PB54_00058)

以上のことから、評価の主体に関わらず、誰が評価してもその客観的な「質」（「2.2.1節」先行研究の説明を参照）が認められる普通・固有名詞述語文において、「疑問語+も」は用いられるが、「疑問語+

でも」は用いられにくいと考えられる。このことは、本稿の「現実性」という観点からの考察が、数量詞述語文以外の名詞述語文にも応用できる可能性を示唆していると言えよう。今後の研究でさらに深く考察していく。

4. まとめ

以上の考察から、数量詞述語文と属性形容詞述語文における、疑問語をとりたてる「も」と「でも」の使い分けのルールを、表5のようにまとめた。

表5 「も」と「でも」の使い分けについて

	述語文の種類	疑問語+も	疑問語+でも
現実性+	属性形容詞述語文 (評価の主体に関わらず、誰が評価してもその客観的な特性が認められる属性形容詞。)	○	×
	数量詞述語文 (評価の主体に関わらず、誰が評価してもその客観的な数量が認められる数量詞。)		

本稿では、先行研究で言及されていない「属性形容詞述語文」と「数量詞述語文」における「現実性」について具体的な定義を行った。また、これを用いて考察を行った結果、表5に示した通り、「現実性+」の場合、「も」は「属性形容詞述語文」と「数量詞述語文」のいずれにおいても用いられるが、「でも」はいずれにおいても用いられないことを明らかにした。

また、この「現実性」という観点を、「色彩形容詞述語文」以外の「属性形容詞述語文」、「数量詞述語文」以外の「名詞述語文」にも適用できる可能性を示した。これを今後の課題としてさらに深く考察していくこととする。

【注】

(注1)：以下、八亀(2008)による形容詞の分類を抜粋の形で示す(pp.41-43)。

この説明により、まず「広い、狭い」はAグループに分類されると考えられる。

Aグループ：特性形容詞(時間的限定性 なし)。

いわゆる「属性形容詞」の大半。

Bグループ：特性形容詞(時間的限定性 なし)。

「すきな」「きれいな」など、話し手の好悪を表す。

Cグループ：特性形容詞と状態形容詞の両側面を持つ。

あつい・いたい/おいしい・おもしろい・つまらない・かわいい。

Dグループ：状態形容詞(時間的限定性 あり)。

いそがしい・あわただしい/まっかな・まっしろな

Eグループ：状態形容詞(時間的限定性 あり)。

いわゆる感情形容詞の大半。

また、この分類では、Dグループの形容詞の例として、色を表す「まっかな」「まっしろな」のような形容詞が挙げられているが、樋口(1996)が「ある種の形容詞は状態形容詞でもあるし、質形容詞でもあって、二重の性格をもっている。」(p.49)「色を表す形容詞についてもおなじことがいえる。「西の空があかい」というばあいの「あかい」は状態をさししめしているが、「ぐみの実はあかい」というときの「あかい」は、物それ自身に恒常的にそなわっている特性としての色をさししめしている。」(p.51)と説明しているように、色を表す形容詞はAグループとDグループの両方の性格を備えていると考えられる。

本稿は、まず属性形容詞について考察するため、状態形容詞としてはたらく用法についてはまた別稿にて考察を行う。

(注2)：ここで「特性」という用語を使う理由は以下のようである。

まず、「2.2.1節」で述べたように、先行研究の説明により、本稿は「特性」を表す側面から、数量詞述語文と属性形容詞述語文とを関連付けて考察していく。また、「3.3.1節」で数量詞の「特性」についての説明とも一致する必要があると考える。

(注3)：「2.1節」で示した通り、日本語記述文法研究会(2009)に「しかし、次のように疑問語の種類や後にくる表現などの使用条件によっては、「でも」と「も」の両方が使用可能な場合もある。」(p.164)と述べられているため、本稿では、まずそこで挙げられている「でも」と「も」の両方が使用可能な「どちら」の考察を行った。

「3.3.1節」で「数量詞述語文」の考察において「どれ」を用いた理由も

同様である。

(注4)：中納言：「文字列検索」で、「どちら+も/でも+赤い/真っ赤/白い/真っ白/黒い/真っ黒/青い/真っ青」というキーワードをそれぞれ入力し、検索対象から「知恵袋、ブログ、国会会議」を除いて（まず地の文から考察したいため）検索した結果、いずれの場合も0例であった。そのため、検索対象を「全てにチェックを入れる」と設定し直し、検索したが、同じ結果であった。

Google：「どちら+も/でも+赤い/真っ赤/白い/真っ白/黒い/真っ黒/青い/真っ青」というキーワードをそれぞれ入力し、検索した結果は、表1の通りであった。

(注5)：Googleでは本稿で考察する比較構文を特定して検索できないため、中納言のみを用いて検索した。検索の方法と結果については以下の通りである。

「どちらも」：短単位検索－書字形出現形が「どちら」、後方共起1キーから1語、「品詞」の「中分類」が「助詞－係助詞」AND「書字形出現形」が「も」、後方共起2キーから2語、「品詞」の「大分類」が「名詞」、後方共起3キーから3語「書字形出現形」が「より」、後方共起5キーから5語、「品詞」の「大分類」が「形容詞」で設定し、検索対象から「知恵袋、ブログ、国会会議」を除いて検索した結果、該当例はなかった。

「どちらでも」：短単位検索－書字形出現形が「どちら」、後方共起1キーから1語、品詞の中分類が助詞－格助詞、AND書字形出現形が「で」、後方共起2キーから2語、「品詞」の「中分類」が「助詞－係助詞」AND「書字形出現形」が「も」、後方共起3キーから3語、「品詞」の「大分類」が「名詞」、後方共起4キーから4語「書字形出現形」が「より」、後方共起5キーから5語、「品詞」の「大分類」が「形容詞」で設定し、検索対象から「知恵袋、ブログ、国会会議」を除いて検索した結果、該当例はなかった。

(注6)：中納言を用いた検索について：

「どれも+数量詞」：短単位検索－書字形出現形が「どれ」、後方共起1キーから1語、「品詞」の「中分類」が「助詞－係助詞」、AND書字形出現形が「も」、後方共起2キーから2語、品詞の中分類が名詞－数詞で設定し、検索対象から「知恵袋、ブログ、国会会議」を除いて検索した結果、見つかった27例のうち、本稿で考察する該当例は3例あった。

「どれでも+数量詞」：短単位検索－書字形出現形が「どれ」、後方共起1キーから1語、品詞の中分類が助詞－格助詞、AND書字形出現形が「で」、後方共起2キーから2語、「品詞」の「中分類」が「助詞－係助詞」AND「書字形

出現形」が「も」、後方共起3キーから3語、「品詞」の「中分類」が「名詞－数詞」で設定し、検索対象から「知恵袋、ブログ、国会会議」を除いて検索した結果、見つかった3例のうち、本稿で考察する該当例はなかった。そのため、検索対象を「全てにチェックを入れる」と設定し直し検索したが、見つかった8例の中にも、該当例はなかった。

Googleを用いた検索について：

数量詞「cm/g/枚/個/冊/件」を例として、「どれ+も/でも+cm/g/枚/個/冊/件」をキーワードで検索した結果、「も」の場合、該当の数量詞述語文は例(15)～例(18)の4例あり、「でも」の場合、該当の例はなかった。

(注7)：Googleでは本稿で考察する普通・固有名詞を特定して検索できないため、中納言のみを用いて検索した。検索の方法と結果については以下の通りである。

「どれ+名詞」：短単位検索、キーが「文末から7語」、書字形出現形が「どれ」、後方共起1キーから1語、「品詞」の「中分類」が「助詞－係助詞」、AND書字形出現形が「も」、後方共起2キーから2語、「品詞」の「大分類」が「名詞」で設定し、検索対象から「知恵袋、ブログ、国会会議」を除いて検索した結果、見つかった20例のうち、本稿で考察する該当例は6例あった。

「どれでも+名詞」：短単位検索－書字形出現形が「どれ」、後方共起1キーから1語、品詞の中分類が助詞－格助詞、AND書字形出現形が「で」、後方共起2キーから2語、「品詞」の「中分類」が「助詞－係助詞」AND「書字形出現形」が「も」、後方共起3キーから3語、「品詞」の「大分類」が「名詞」で設定し、検索対象から「知恵袋、ブログ、国会会議」を除いて検索した結果、見つかった14例は、いずれも以下のような名詞述語文ではない例で、本稿で考察する該当例はなかった。

例：レンズは広角から超望遠までどれでも対応できる。(LBh7_00058)

【参考文献】

- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味用法の記述的研究』(国立国語研究所報告44) 秀英出版。
- 神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタクス」『月刊 言語8』6巻9号, 大修館書店。
- 奥田靖雄 (1988) 「述語の意味的なタイプ」(未公開) 引用は 奥田靖雄著作集刊行委員会(編)『奥田靖雄著作集02 言語学編(1)』(2015) pp.106-118, むぎ書房による。
- 奥津敬一郎 (1989) 「数量表現」井上和子(編)『日本文法小事典』大修館書店。
- 矢澤真人 (1989) 「修飾語と並立語」『講座 日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体(上)』明治書院。

- 野田尚史（1995）「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主題と取り立て』pp.1-35, くろしお出版.
- 樋口文彦（1996）「形容詞の分類－状態形容詞と質形容詞－」言語学研究会（編）『ことばの科学7』pp.39-60, むぎ書房.
- 樋口文彦（2001）「形容詞の評価的意味」言語学研究会（編）『ことばの科学10』pp.43-66, むぎ書房.
- 八亀裕美（2003）「形容詞の評価的意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』（15）pp.13-40, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
- 八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究－類型論的視点から－』明治書院.
- 日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法5』くろしお出版.
- 日本語文法学会（2014）『日本語文法事典』大修館書店.

考察に用いたコーパス：

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ） 国立国語研究所

（しゅう かん・本学博士後期課程在学）